

もうすぐフィナーレ 利一とハナの物語

アイデアママンだった祖父 身近に

——主人公のモデル、太一氏のチャレンジ精神が励みになると、読者から反響が寄せられています。

中山 うれしい限りです。私は祖父を写真でしか知らないのですが、小説を通してその生き方を多くの方に知ってもらえますし、私自身も祖父を身近に感じるようになります。明治時代に山口の滝部から出てきたのは、人の紹介だったのですが、きょうだいも多く長男として家計を支えるという自覚があったのでしよう。

高殿 滝部からまず長府（下関）に行き、門司（北九州）、大分、神戸へという流れだったみたいですね。今回、一族の方に取材させていたのは醍醐味でした。

——飛行機や外車を使った斬新な宣伝戦略で、「広告王」とも呼ばれた太一氏の姿は小説でも描かれました。

中山 祖父のそのままと宣伝戦略は今でもそのまま通じますし、アイデアママンだったと



「東洋の化粧品王」と呼ばれ、再来年に120周年を迎える大阪市の老舗化粧品会社「クラブコスメテックス」の創業者、中山太一氏（1881〜1956年）をモデルに、本紙朝刊で好評連載中の高殿円さんの小説「コスメの王様」が、11月上旬にフィナーレを迎えます。そこで、創業者の孫で同社社長の中山ユカリさんと高殿さんに、立志伝中の人物から見えてくる現代の仕事や生き方について語ってもらいました。（横山由紀子）

女性の自立 フィクションで訴え

作家

高殿円さん



たかどの・まどか 神戸市出身。平成12年、「マグダミア 三つの星」で角川学園小説大賞奨励賞を受賞しデビュー。本紙連載の小説「グランドシャトー」のほか、「トッカラン 特別国税徴収官」「上流階級 富久丸百貨店外商部」などドラマや舞台となった作品も多数。

対談

クラブコスメテックス社長

中山ユカリさん



なかやま・ゆかり 大阪市出身。平成14年、「クラブコスメテックス」代表取締役社長に就任。23年からは「マリークアントコスメテックス」代表取締役社長も務める。累計1100万個販売の「すっぴんシリーズ」や新ブランド「デイジードール」を展開する。

感じています。高殿 また、太一さんは女性のための文化研究所や女性従業員の学校を作り、当時から働く女性のキャリア育成を「クラブ洗粉」は画期的な商

品でした。中山 中身は若干変わって

品でしたが、明治39年の発売以来、115年続くロングセラーです。祖父の代からの品質のクラブの伝統を守り続けています。

高殿 何がどう優れていたのかを、しっかり書き込まな

れませんでした。中山 先代の父（壽一氏）は「マリークアント」や「フルベール」を残しました。私も創業者や先代同様、ヒット商品という思いで、「すっぴんシリーズ」や、新ブランド「デイジードール」を展開しています。

高殿 私ができることは、フィクションの世界で訴えていくことだと思っています。

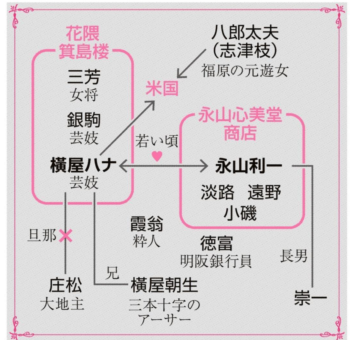
高殿 明治生まれの女性が隷属することなく、ちゃんと一人の人間として生きていたんだよ、ということを書きたかったのです。そして女性のキャリアに心を配った事業家

高殿 明治生まれの女性が隷属することなく、ちゃんと一人の人間として生きていたんだよ、ということを書きたかったのです。そして女性のキャリアに心を配った事業家



主人公・永山利一のモデルとなった中山太一氏（クラブコスメテックス提供）

なかやま・たいち 明治14年、山口県滝部村（現・下関市）に12人きょうだいの長男として生まれる。36年、神戸・花隈（はなぐま）で化粧品雑貨の卸業「中山太陽堂」を創業。「クラブ洗粉」が大ヒット商品となる。昭和31年に74歳で死去。中山太陽堂は「クラブコスメテックス」として息子の壽一氏（故人）、孫のユカリ氏らに受け継がれ、令和5年に創業120周年を迎える。



「コスメの王様」あらすじ

明治後期、山口出身の永山利一は神戸・花隈で事業を起し、化粧品業界で存在感を高めていく。いずれ一緒にいたいと望んだ芸妓のハナは、自ら身を引きアメリカへ。悲しみをこらえ事業拡大に邁進する利一だが、時代は太平洋戦争に突入する。



利一のモデルになった中山太一氏の孫で「クラブコスメテックス」社長の中山ユカリさん（右）と作家の高殿円さん（大阪府北区（南雲都撮影））

高殿 私ができることは、フィクションの世界で訴えていくことだと思っています。

高殿 明治生まれの女性が隷属することなく、ちゃんと一人の人間として生きていたんだよ、ということを書きたかったのです。そして女性のキャリアに心を配った事業家

高殿 明治生まれの女性が隷属することなく、ちゃんと一人の人間として生きていたんだよ、ということを書きたかったのです。そして女性のキャリアに心を配った事業家